町長発！ “がんばる”トーク

町長　上川元張

先日、映画「ぼけますから、よろしくお願いします。～おかえりお母さん～」を見る機会がありました。これは、ドキュメンタリー作家である信友直子監督が、呉市内に住む認知症を発症した自分の母親と90代の父親を自ら撮影した映像をもとに映画化した、老老介護の記録です。２０１８年に劇場公開されて全国で10万人を動員する大ヒットとなった映画の続編で、監督自ら綴った同名の著書も新潮文庫から出ています。

映画では、認知症で家事ができなくなっていく母親の自分自身へのいら立ち、代わって料理や洗濯等の家事を担い、介護のために筋トレまで始める父親の使命感、症状が進行する母親と支える父親を東京から遠距離介護で見守るひとり娘である監督の心の葛藤など、家族それぞれの思いや感情が交錯します。ただ、悲愴感はなく、認知症からくる母親のボケとそれを温かく包み込む父親の軽妙な言動など、熟練の夫婦漫才のようなおとぼけエピソードもいくつか出てきます。「人生はクローズアップで見ると悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇だ」という喜劇王チャップリンの言葉のとおり、娘というより撮影者としての一歩引いた目線で描かれています。

また、著書では、家族が認知症とその介護で次第に社会から閉じこもっていく様子、介護認定を受けてホームヘルパーを受け入れ、デイサービスを利用することで、社会とのつながりを取り戻していく様子なども描かれており、家庭内で蓋をされがちでなかなか表に出てこない、認知症という問題と社会との関わりについても考えさせてくれます。

認知症の患者は年々増えており、2年後には全国で７００万人、65歳以上の5人に1人が認知症になるといわれています。国民に身近な問題であり、多くの家庭が直面する課題です。

折しも、今年6月に「認知症基本法」が成立しました。これは、認知症がある人でも社会の一員として尊厳をもって生きていけるよう、社会全体で認知症を理解し、支援していこうという内容の法律です。まずは、認知症の理解の一助となる、良い作品に出合えたので、皆様にご紹介させていただきました。